

## 日本ワイルド協会 第38回大会 シンポジウム

### 文学嫌いのためのオスカー・ワイルド —— 『オスカー・ワイルドの世界』徹底活用法

司会兼ディスカッサント 田中裕介 (青山学院大学准教授)  
講師 富士川義之 (元東京大学教授)  
講師 河村錠一郎 (一橋大学名誉教授)  
講師 角田信恵 (岐阜聖徳学園大学教授)

#### シンポジウム主旨

本年5月に本協会の会員が中心となった『オスカー・ワイルドの世界』が刊行された。最新のワイルド研究の成果が盛り込まれた本書は、学術的業績の記念碑である以上に、教育の現場で活用すべきテキストであるといえよう。編者の富士川氏は、「まえがき」において、デカダントとしてのワイルドに対する同時代の批判について「ワイルドの思うつぼ」と述べており、またワイルドによるアメリカ風の物質主義批判について指摘すると同時に、「これとかなり矛盾するようだが」という語句を挟んで、「社会を華麗なパフォーマンスを実演する場と見なし」たワイルドについて言及している。ここで示唆されているワイルドと同時代社会の「矛盾」をはらんだ関係、またワイルドの意識の層が一枚挟まった関係は、本書の「研究の動向」で浦部尚志氏が述べている「学術的な分野の研究成果により明らかにされたワイルドの真の姿と一般読者の間で未だに広まっているワイルド像」の間の隔たりを埋める鍵になると考えられる。「デカダント」としてのみのワイルド像の流布が、「文学好き」「芸術好き」の読者がワイルドのイメージをそのように固定したままワイルドを読んできた歴史の堆積の結果だとすれば、「文学」への関心が一般的に薄れている昨今の状況を、「ワイルドの真の姿」を伝える機会として逆用できるのではないか。大文字の「文学」は、「社会」と対置される窮屈な拘束衣となって、本来幅広く、多様な関係を「社会」と結んでいたワイルドの受容を狭めてきたようにも思われる。

富士川氏は本書収録の論文において、批評理論に基づいた一面的な読解では到底すくいきれない複雑な内面をもつ「ワイルドの真の姿」が、むしろワイルドの童話を丁寧に読み込む「一般読者」にまっすぐ伝わる可能性を示している。教室での経験にも基づいた氏のワイルドの捉え方からは、教え方次第では、むしろ「文学」に過剰な思い入れのない現在の学生の方が、「ワイルドの真の姿」を抵抗なく把握できるのかもしれないという感想が生じる。

河村氏は、本書収録の論文において、ワイルドと当時の美術界の関わりを詳述し、ワイルドとホイッスラー、ワイルドとビアズリーの関係を歴史の実態に即して描き出すなかで、単にワイルドを同時代のヴィクトリア朝社会に対して批判的な前衛的存在として位置付ける「一般読者の間で未だに広まっている」捉え方を相対化するような、冷静な歴史把握を通じたワイルドの取り上げ方の見本を提示している。

角田氏は、近著『オスカー・ワイルドにおける倒錯と逆説』（彩流社）において、批評理論のタームを駆使しながらも、その一方ワイルドの手紙などの史料を効果的に用いることで、セクシュアリティの切り口からワイルドを論じつつ歴史的存在としての「ワイルドの真の姿」を見定めるといった難事に挑み、成功している。

本シンポジウムでは、ワイルドを長い時間をかけてそれぞれ深く読み込んできた上記三名の講師が、実際に『オスカー・ワイルドの世界』収録の諸論文をテキストとして、三者三様に見極めた「ワイルドの真の姿」を、硬直した「文学」に囚われていない「一般読者」に伝えるための実演を示す。